

令和6年度10月

人権一口講座



猫たちが教えてくれたこと

ある職員の家で起こった出来事です。

「数か月前に我が家で、ある事件が起きました。仕事先の私へ母から電話が。すぐに出ることができなかったため、しばらくして電話を返すと、母は慌てた様子で「物置の中から子猫の鳴き声がある。見てみると、七匹一とも小さくて、生まれてすぐなのではないか。」とのこと。そういえば、一ヶ月前くらいから猫が数匹、庭を横切るのをよく見ていました。当時はずっと雨が続いていました。駐車場兼物置には扉がなく、荷物が重なって隠れやすい場所でもあり、親猫には赤ちゃんを産みやすい環境だったのかもしれない。私が電話に出なかったため、母はパニックになり、「どこかに捨てに行こうか」とも思ったようです。しかし、体を寄せ合ってブルブル震えている、一生懸命に生きている子猫たちを見てみると連れ出すことはできず、助けを求めて動物愛護センターに電話をしたとのことでした。そこで教えていただいたのが、「人間のおいが付くと、親猫が近づかなくなる。絶対に子猫を触らないこと。親猫が子猫を連れて元の場所へ帰っていくように、猫が嫌う酢を浸した布を近くに置いておくこと。」だったそうです。母は早速酢を含ませた布を子猫がいる付近にたくさん置いたと言っていました。

さあ、そこからは子猫のことが頭から離れません。終業後、急いで家に帰り子猫を見に行くと、人の気配を感じたのか荷物の奥に入ってしまった。しかし、鳴き声はします。親猫がやってきている様子はなし。心配ですが、動物愛護センターのホームページの記載を守り、心を鬼にして見守ることにしました。

次の日の朝すぐに行ってみると、子猫の弱々しい鳴き声。このままにしておくかと死んでしまうかもしれない。でも、今は何もできることがありません。弱ってしまったらすぐに動物愛護センターに連絡をしようと思うけれど、その間に死なせてしまったらどうしよう。仕事でも子猫のことが気になって、涙が出てきます。しかし、次の日は驚きの変化が。子猫が元気になる、物置の外まで出てくるようになったのです。親猫が来ていたようです。子猫たちが助かった、良かったと嬉しくなりましたが、今度は次の悩みが発生しました。「猫の親子がこのまま家に住みついたら、どうなる？」私の家は犬を飼っていませんし、多数の猫を飼うことはできません。でも、困るからどこかに行ってほしいと追い出して、猫たちの幸せに繋がるのか？どうにもできないジレンマを抱えながら、ただ猫の親子が幸せになることを願い、様子を見ることしかできませんでした。

翌々日、猫の飼い主が我が家を訪ねてこられます。親猫が子猫数匹を家に連れ帰ったことで、猫の出産に気づき、全ての子猫を預かりに来られたのです。そうして、我が家の大事件は良い結果で終わりました。家族皆で「本当に良かったね。」と喜び合いました。動物愛護センターの教えに感謝しました。ほんの数日でしたが、必死で猫たちのことを考えました。そして、「動物愛護という言葉も、命の大切さも、関わる人々の取り組みや気持ちも分かっているつもりでいたけれど、何も分かっていなかった」ということに気づきました。

今回のように、自分に関わりがない事象に対しては、どうしても「他人事」になりがちです。「自分が当事者だったら、関わっていたら」と想像することを忘れないようにし、どんなときでも、命の大切さや、優しさや思いやりのある行動がとれるよう心掛けたいものですね。皆さんはどう思われますか。

(熊本市ふれあい文化センター広報紙「かけはし」令和6年度10月号より)

短いメッセージ

「おはよう」私も「おはよう」朝の一言
家族のきよりが またちぢまる

熊本市・熊本市教育委員会・熊本市人権啓発市民協議会のカレンダー 杉上小学校 5年 西田 和佳さん(令和5年度の作品より)